

氏名（本籍） 川上 啓太郎（神奈川県）
学位の種類 博士（音楽学）
学位記番号 甲第18号
学位授与年月日 令和4年3月19日
学位授与の要件 学位規則第3条第3項
学位論文題目 シャルル・ケクランの「室内楽・ピアノ期（1911-1921）」における
ナラティヴ構築
——彼の「漸次的解明」の概念に着目した作品53, 65, 80の分析を
中心に——

学位論文等審査委員

(総合審査)	委員長	教授	吉成 順
		教授	阪上 正巳
		教授	津田 正之
		准教授	瀬尾 文子
		准教授	中田 朱美
		准教授	三浦 雅展
(論文審査)	委員長	教授	吉成 順
		教授	津田 正之
		准教授	瀬尾 文子
		准教授	中田 朱美
			安川 智子（北里大学一般教育部専任講師）

審査結果の要旨

審査所見

学位審査委員会は、申請者 川上啓太郎 の学位申請論文『シャルル・ケクランの「室内楽・ピアノ期（1911-1921）」におけるナラティヴ構築——彼の「漸次的解明」の概念に着目した作品53、65、80の分析を中心に』に関して厳正な審査を行った。

以下に、1. 論文審査、2. 総合審査に関する所見を記す。

1. 論文審査

この論文は、ケクランの初期作品の分析を出発点に、彼の壮年期の器楽作品、とくに《ヴィオラ・ソナタ》、《ペルシアの時》、《ピアノ五重奏曲》について、文学的インスピレーションや「感情」との関係から各作品のナラティヴ構造を明らかにし、同時に、「重要な主題が後から次第に立ち現れてくる」という独自の楽曲構成法を、ケクラン自身の「漸次的解明」という言葉と結び付けつつ丁寧に解き明かしていく。ナラティヴの解釈においてはこれまで指摘されていない文学作品との関係を突き止めるなどの成果を生み、分析は自筆譜などの一次資料を参照しテキストクリティークを行いながら実証的に進められていて、説得力のあるものとなっている。このような作曲家像、作品像は先行研究では解明されておらず、学術的な独自性を打ち出すことに成功した研究として高く評価できる。ケクラン作品の形式構造に関する従来の通念を否定し、また多くの出版作品にみられる多くの誤りを指摘したという点でも意義深い。

一方で、当論文における重要概念の概念規定がやや甘く、彼の考え方や作曲技法の歴史的位

づけに関する吟味ももの足りないなど、論文としての仕上がりという点で、研究の独自性や意義に見合わない弱さが認められることも否めない。

とはいえ、上述のように本研究の学術的価値は極めて高いものであることから、本論文が音楽学研究領域の学位論文として合格であると判定する。

2. 総合審査

総合審査では、論文審査の評価を確認したうえで、申請者がこれまで発表した研究業績の内容、大学非常勤講師や TA としての教育活動の評価なども考慮して、総合的な審査を行った。その結果、申請者が「自律して研究を展開することができる意志と能力を備え、我が国の音楽文化の進展に寄与するとともに、国際的にも有意義な問題提起のできる質の高い研究者」として、将来も活動していくことが十分に期待できることから、「博士（音楽学）Doctor of Philosophy in Musicology」の学位を授与するに相応しいものと判定する